

報 告

情緒障害児短期治療施設に入所する被虐待児童の行動特徴について

The behavioral features of abused children in residential treatment center for emotionally disturbed children

八木 修司¹⁾, 藤原 慶二²⁾
中村 有生³⁾

要約：本研究は、近畿圏の情緒障害児短期治療施設（以下、情短と略す）に入所する被虐待児童の行動特徴についてアンケート調査研究した結果とそれに関して検討したものである。まず、調査結果から得られた情短における被虐待児童の現状（占有率やその内容等）、虐待を受ける可能性の高い発達障害児童の状況について示す。次に、情短における被虐待児童の行動特徴について詳細に検討した結果について示す。特に、行動特徴を外向きに表れる行動特徴（外化された行動）と内向きに表れる行動特徴（内化された行動）に分けて比較検討を行った。また心理治療場面において子ども達が示す行動特徴についても結果を示す。最後に、そうした子ども達の行動特徴に対して情短ではどのように生活支援や心理ケア等を行うべきかについて若干の考察を加えたい。

Key Words：情緒障害児短期治療施設、被虐待児童の行動特徴、施設での生活支援や心理ケア

I はじめに

平成12年に「児童虐待の防止等に関する法律」が施行されたが、この数年間、児童虐待は減少するどころか増加の一途にある。従って、深刻な虐待を受けた子ども達の中で保護者と分離されて児童福祉施設に入所するケースも増加している現状にある。児童養護施設の入所が多数を占めるが、子どものメンタルケアを考慮して、生活支援スタッフの他に、心理士や医師、看護師という医療スタッフも有する情緒障害児短期治療施設（以下、情短と略す）への期待が高まり、多くの被虐待児童が入所している。

情短に入所した被虐待児童は心身の成長に根ざした修正的な生活支援や心理治療を受けるが、そのために、まず、虐待体験から生じた行動特徴の理解が必要である。どのような行動に対して適切なケアを図るかについては欠かせない作業であると思われる。今回は近畿圏の情短を対象にアンケート調査を実施したが、その結果を示

し、具体的なケアの方法についても考えたい。

II 近畿圏の情短における被虐待児童の支援に関するアンケート調査の概要

1 アンケート調査の趣旨

情短は設立時の昭和30年代後半から長らく不登校児童の支援を中心に行ってきたが、平成12年の「児童虐待の防止に関する法律」が制定されてきてから、被虐待児童の生活支援や治療的関わりが社会ニードとしても高まり、現在では、各情短に占める被虐待児童はかなりの高率になっている。また、近年では発達障害児童（アスペルガー症候群等の広汎性発達障害、注意欠陥多動障害〔ADHD〕等）の入所も増加している傾向にあるが、これに関しては虐待との関連性もあると思える。場の状況が十分に把握出来なかったり、集中力や続かなかつたりする行動特徴を抱える発達障害児童は虐待を受ける可能性が高いためである。いずれにしても、不登校中心から被虐待児童中心（発達障害児童も含む）への対象児童の変化は情短の生活支援や心理ケアに大きな影響を与えているが、その支援や治療を考える際に、現状の情短に入所している子ども達がどのような行動特徴を示しているのか検討することが大切である。今回は、特に情短がどのように被虐待児童（発達障害児童も含めて）の行動

2008年12月4日受付／2009年1月21日受理

1) Syuji YAGI

関西福祉大学 社会福祉学部

2) Keiji FUJIWARA

関西福祉大学 社会福祉学部

3) Yu NAKAMURA

兵庫県清水が丘学園

特徴を捉えているのかに重点をおいて近畿圏の情短に調査を行った。また該当の子ども達に対する生活支援や心理ケアについて調査も行った。

2 アンケート調査実施時期・対象児童・調査項目等

(1) アンケート調査実施時期

八木他(2006)の調査は、近畿情緒障害児短期治療施設協議会の協力のもとに行われた。平成18年11月上旬～12月上旬において近畿圏の情短9カ所において実施された。

(2) 対象児童

近畿圏の情短における平成18年10月1日付けの入所児童を対象とした(312名、小学校1年生～高校3年生〔中卒児で進学していない児童も含む〕)。

(3) アンケート調査内容

- ・情短の施設概要(入所・通所児童数、職員数等)
- ・被虐待児童の入所数
- ・発達障害児童(LD, ADHD, アスペルガー等)の入所数
- ・被虐待児童の行動特徴(内化する行動、外化する行動)^{注1)}
- ・生活支援上問題が起こる時間帯
- ・生活支援上の留意点、心理治療の現状、施設全体における支援の現状
- ・児童のアセスメント、支援方法を巡る職員の情報交換の現状
- ・危機管理について(マニュアル作成も含めて)
- ・今後望まれる施設の整備(支援方法や設備等)

これらのアンケート調査から得られた結果は、情短での様々な支援やケアに関係しているが、今回は紙面の制約もあり、上記の内の被虐待児童の行動特徴(内化する行動、外化する行動)と心理治療場面で行動の状況に焦点を絞り、そこから得られる結果に基づいて情短の支援やケアを考えてみたい。

3 アンケート調査結果

(1) 被虐待児童の入所

近畿の情短(9施設)における312名の入所児童において被虐待児童は223名であり、71.5%と高い。虐待の種別の人数は以下の通りである。ただし重複がある(図1参照)。

- ・身体的虐待125名(被虐待児童の40.1%)
- ・ネグレクト70名(被虐待児童の22.4%)
- ・心理的虐待19名(被虐待児童の6.1%)
- ・性的虐待9名(被虐待児童の2.9%)

(2) 発達障害児童の入所

312名の入所児童において発達障害(LD, ADHD, アスペルガー症候群、高機能自閉症等-医師のいない情短もあり、障害の疑いも含めた)の児童数は118名あり、全体の37.8%である。内訳は以下の通りである(図2参照)。

- ・ADHD(疑いを含む) 54名(全入所児童の17.3%)
- ・アスペルガー症候群(疑いを含む) 41名(全入所児童の13.1%)
- ・LD(疑いを含む) 26名(全入所児童の8.3%)
- ・高機能自閉症(疑いを含む) 14名(全入所児童の4.5%)

(3) 被虐待児童の行動特徴

被虐待児童の情短内の不適応行動を外向きに現れる行動(外化された行動)と内向きに現れる行動(内化された行動)に分けて調査したところ、以下の項目が高かった(図3、図4参照)

〔外化された行動〕

外化された行動の有無に関する回答のあったうち「外化された行動が有る」に該当する274名の児童において以下の項目が高かった。

- ・他者に対する挑発(虐待やいじめを招く) 84名

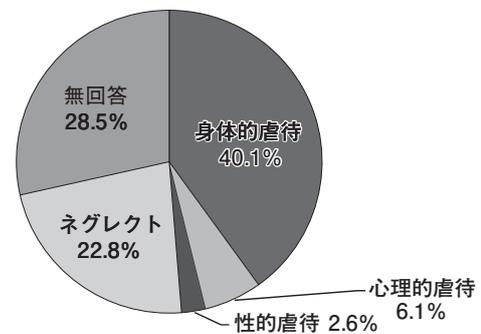


図1 被虐待児童の入所状況

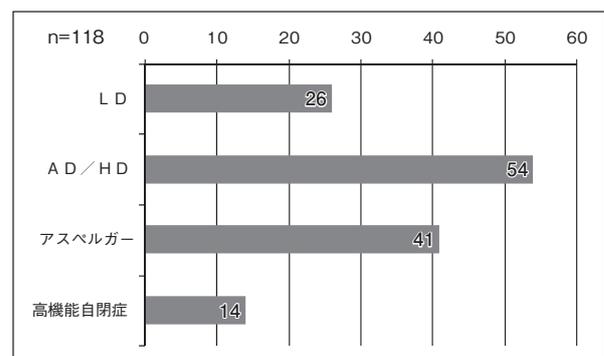


図2 発達障害児の入所状況

(全入所児童の30.7%)

- ・衝動性のコントロールが弱い 73名 (全入所児童の26.6%)
- ・他者を攻撃する (叩く, 蹴るなど) 47名 (全入所児童の17.2%)

〔内化された行動〕

内化された行動の有無に関する回答のあったうち「内化された行動が有る」に該当する256名の児童において以下の項目が高かった。

- ・不平や不満の訴えが過剰 72名 (全入所児童の28.1%)
- ・認知的に非常に過敏であり, 不安が強い 36名 (全入所児童の14.1%)
- ・自発性の欠如を示し不活発 35名 (全入所児童の13.7%)

Ⅲ 情短における被虐待児童の行動特徴

1 統計の手法

統計的な分析にはSPSS16.0を使用し, 被虐待児223名

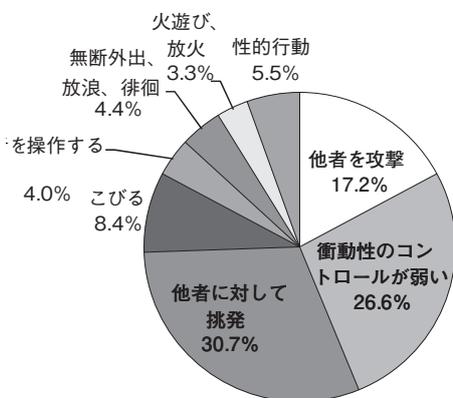


図3 被虐待児の外化された行動

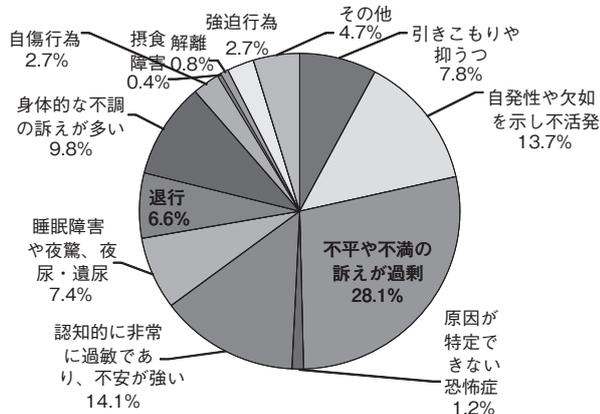


図4 被虐待児の内化された行動

を対象として, 性別と年齢 (3区分) を説明変数としたクロス集計を行った。その際, 変数間の関連性を調べるため χ^2 (カイ) 二乗検定を行った。危険率の標記は以下の通りである。

危険率の標記	P < .05	*
P < .01	**	
P < .001	***	
NS	有意差が認められない場合	

2 調査結果

本論文では有意差が認められたものに焦点を当て結果と考察を加えることとする。なおアンケート調査の年齢に関する質問項目は小学1～6年生, 中学1～3年生, 高校生, 中学卒業の11区分で回答を求めている。これを分析の時に, 小学生 (回答項目の「小学1～6年生」が該当), 中学生 (回答項目の「中学1～3年生」が該当), 高校生以上 (回答項目の「高校生」と「中学卒業」が該当) の3区分とした。

(1) 性別×虐待要因 (第1要因)

性別と虐待要因 (第1要因) のクロスでは, 「身体的虐待」, 「心理的虐待」は男性が, 「性的虐待」と「ネグレクト」は女性の割合が高い傾向となっている。

(2) 性別×内化された行動の有無

性別と内化された行動の有無のクロスでは, 内化され

(1) 性別×虐待要因 (第1要因)

		第一要因				合計
		身体的虐待	心理的虐待	性的虐待	ネグレクト	
男性	人数	79	11	0	34	124
	%	63.7%	8.9%	0.0%	27.4%	100.0%
女性	人数	46	8	8	37	99
	%	46.5%	8.1%	8.1%	37.4%	100.0%
合計	人数	125	19	8	71	223
	%	56.1%	8.5%	3.6%	31.8%	100.0%

**

(2) 性別×内化された行動の有無

		内化された行動の有無		
		有り	無し	合計
男性	人数	93	31	124
	%	75.0%	25.0%	100.0%
女性	人数	87	12	99
	%	87.9%	12.1%	100.0%
合計	人数	180	43	223
	%	80.7%	19.3%	100.0%

*

(3) 性別×内化された行動 (第1順位)

		第1順位 (内化)													
		引きこもり や抑うつ	自発性や 欠如を示し 不活発	不平や不 満の訴え が過剰	原因が特 定できな い恐怖症	認知的に非 常に過敏で あり、不安 が強い	睡眠障害 や夜驚、夜 尿・遺尿	退行	身体的な 不調の訴 えが多い	自傷行為	摂食障害	解離	強迫行為	その他	合計
男性	人数	8	17	25	1	20	7	6	1	2		1	2	3	93
	%	8.6%	18.3%	26.9%	1.1%	21.5%	7.5%	6.5%	1.1%	2.2%	0.0%	1.1%	2.2%	3.2%	100.0%
女性	人数	5	9	33		5	7	5	15	3	1	1		3	87
	%	5.7%	10.3%	37.9%	0.0%	5.7%	8.0%	5.7%	17.2%	3.4%	1.1%	1.1%	0.0%	3.4%	100.0%
合計	人数	13	26	58	1	25	14	11	16	5	1	2	2	6	180
	%	7.2%	14.4%	32.2%	0.6%	13.9%	7.8%	6.1%	8.9%	2.8%	0.6%	1.1%	1.1%	3.3%	100.0%

**

(4) 性別×外化された行動 (第1順位)

		第1順位 (外化)									合計
		他者を攻撃	衝動性のコ ントロール が弱い	他者に対し て挑発	こびる	他者を操作 する	無断外出、 放浪、徘徊	火遊び、放火	性的行動		
男性	人数	20	35	43	4	2	2	1	6	113	
	%	17.7%	31.0%	38.1%	3.5%	1.8%	1.8%	0.9%	5.3%	100.0%	
女性	人数	15	14	28	12	6	5	7	1	88	
	%	17.0%	15.9%	31.8%	13.6%	6.8%	5.7%	8.0%	1.1%	100.0%	
合計	人数	35	49	71	16	8	7	8	7	201	
	%	17.4%	24.4%	35.3%	8.0%	4.0%	3.5%	4.0%	3.5%	100.0%	

**

た行動が男性に比べ女性の方が有りとなる割合が高い傾向となっている。

(3) 性別×内化された行動 (第1順位)

性別と内化された行動 (第1順位) のクロスでは、「引きこもりや抑うつ」、「自発性や欠如を示し不活発」、「原因が特定できない恐怖症」、「認知的に非常に過敏であり、不安が強い」、「睡眠障害や夜驚、夜尿・遺尿」、「退行」、「強迫行為」、「その他」の8項目において男性が女性を上回る傾向となっている。それ以外の「不平や不満の訴えが過剰」、「身体的な不調の訴えが多い」、「自傷行為」、「摂食障害」、「解離」の5項目については女性が男性を上回る傾向となっている。

(4) 性別×外化された行動 (第1順位)

性別と外化された行動 (第1順位) のクロスでは、「他者を攻撃」、「衝動性のコントロールが弱い」、「他者に対して挑発」、「性的行動」の4項目で男性が女性を上回る傾向となっている。それ以外の「こびる」、「他者を操作する」、「無断外出、放浪、徘徊」、「火遊び、放火」の4項目については女性が男性を上回る傾向となっている。

(5) 性別×内化された行動 (第1順位) × 虐待種別 (第1要因)

性別と内化された行動 (第1順位) と虐待種別 (第1要因) のクロスにおいて、身体的虐待においてのみ有意差が認められた。

身体的虐待が第1要因となる場合、「引きこもりや抑うつ」、「自発性や欠如を示し不活発」、「原因が特定できない恐怖症」、「認知的に非常に過敏であり、不安が強い」、「退行」、「強迫行為」の6項目で男性が女性を上回る傾向となっている。それ以外の「不平や不満の訴えが過剰」、「睡眠障害や夜驚、夜尿・遺尿」、「身体的な不調の訴えが多い」、「自傷行為」、「摂食障害」、「解離」、「その他」の7項目については女性が男性を上回る傾向となっている。

(6) 性別×外化された行動 (第1順位) × 虐待種別 (第1要因)

性別と外化された行動 (第1順位) と虐待種別 (第1要因) のクロスにおいて、身体的虐待においてのみ有意差が認められた。

身体的虐待が第1要因となる場合、「衝動性のコントロールが弱い」、「他者に対して挑発」、「性的行

(5) 性別×内化された行動(第1順位)×虐待種別(第1要因)

第一要因	性別	第1順位(内化された行動)														
		引きこもり や抑うつ	自発性や 欠如を示し 不活発	不平や不 満の訴え が過剰	原因が特 定できな い恐怖症	認知的に非 常に過敏で あり、不安 が強い	睡眠障害 や夜警、夜 尿・遺尿	退行	身体的な 不調の訴 えが多い	自傷行為	摂食障害	解離	強迫行為	その他	合計	
身体的虐待	男性	人数	4	8	13	1	15	6	6	1	1	0	1	2	1	59
		%	6.8%	13.6%	22.0%	1.7%	25.4%	10.2%	10.2%	1.7%	1.7%	0.0%	1.7%	3.4%	1.7%	100.0%
	女性	人数	2	2	17	0	1	5	2	7	1	1	1	0	2	41
		%	4.9%	4.9%	41.5%	0.0%	2.4%	12.2%	4.9%	17.1%	2.4%	2.4%	2.4%	0.0%	4.9%	100.0%
	合計	人数	6	10	30	1	16	11	8	8	2	1	2	2	3	100
		%	6.0%	10.0%	30.0%	1.0%	16.0%	11.0%	8.0%	8.0%	2.0%	1.0%	2.0%	2.0%	3.0%	100.0%*
心理的虐待	男性	人数	2	1	1			1		0	1				2	8
		%	25.0%	12.5%	12.5%			12.5%		0.0%	12.5%				25.0%	100.0%
	女性	人数	0	1	2			0		1	1				1	6
		%	0.0%	16.7%	33.3%			0.0%		16.7%	16.7%				16.7%	100.0%
	合計	人数	2	2	3			1		1	2				3	14
		%	14.3%	14.3%	21.4%			7.1%		7.1%	14.3%				21.4%	100.0%NS
性的虐待	男性	人数														
		%														
	女性	人数		1	1		2		1	1	1					7
		%		14.3%	14.3%		28.6%		14.3%	14.3%	14.3%					100.0%
	合計	人数		1	1		2		1	1	1					7
		%		14.3%	14.3%		28.6%		14.3%	14.3%	14.3%					100.0%NS
ネグレクト	男性	人数	2	8	11		5	0	0	0					26	
		%	7.7%	30.8%	42.3%		19.2%	0.0%	0.0%	0.0%						100.0%
	女性	人数	3	5	13		2	2	2	6						33
		%	9.1%	15.2%	39.4%		6.1%	6.1%	6.1%	18.2%						100.0%
	合計	人数	5	13	24		7	2	2	6						59
		%	8.5%	22.0%	40.7%		11.9%	3.4%	3.4%	10.2%						100.0%NS

(6) 性別×外化された行動(第1順位)×虐待種別(第1要因)

第一要因	性別	第1順位(外化された行動)									合計	
		他者を攻撃	衝動性のコ ントロール が弱い	他者に対し て挑発	こびる	他者を操作 する	無断外出、 放浪、徘徊	火遊び、放火	性的行動			
身体的虐待	男性	人数	14	26	26	1	2	0	1	4	74	
		%	18.9%	35.1%	35.1%	1.4%	2.7%	0.0%	1.4%	5.4%	100.0%	
	女性	人数	10	8	14	5	2	3	2	0	44	
		%	22.7%	18.2%	31.8%	11.4%	4.5%	6.8%	4.5%	0.0%	100.0%	
	合計	人数	24	34	40	6	4	3	3	4	118	
		%	20.3%	28.8%	33.9%	5.1%	3.4%	2.5%	2.5%	3.4%	100.0%*	
心理的虐待	男性	人数	2	1	5			1			9	
		%	22.2%	11.1%	55.6%			11.1%			100.0%	
	女性	人数	2	1	3			1			7	
		%	28.6%	14.3%	42.9%			14.3%			100.0%	
	合計	人数	4	2	8			2			16	
		%	25.0%	12.5%	50.0%			12.5%			100.0%NS	
性的虐待	男性	人数										
		%										
	女性	人数			2	1			2	1	6	
		%			33.3%	16.7%			33.3%	16.7%	100.0%	
	合計	人数			2	1			2	1	6	
		%			33.3%	16.7%			33.3%	16.7%	100.0%NS	
ネグレクト	男性	人数	4	8	12	3	0	1	0	2	30	
		%	13.3%	26.7%	40.0%	10.0%	0.0%	3.3%	0.0%	6.7%	100.0%	
	女性	人数	3	5	9	6	4	1	3	0	31	
		%	9.7%	16.1%	29.0%	19.4%	12.9%	3.2%	9.7%	0.0%	100.0%	
	合計	人数	7	13	21	9	4	2	3	2	61	
		%	11.5%	21.3%	34.4%	14.8%	6.6%	3.3%	4.9%	3.3%	100.0%NS	

(7) 性別×心理治療場面での行動特徴

n=223

		攻撃的である	こだわる	気が散る	色々な遊びをする	遊びを嫌がる	遊び方を知らない	遊ぶことに不安	象徴的(暗喩)な遊びを用いる	行動化(プレイルームから出る, 時間を延ばす等)	その他
男性	人数	50	52	35	44	7	26	20	37	35	11
	%	40.3%	41.9%	28.2%	35.5%	5.6%	21.0%	16.1%	29.8%	28.2%	8.9%
女性	人数	30	24	24	30	4	11	10	38	33	12
	%	30.3%	24.2%	24.2%	30.3%	4.0%	11.1%	10.1%	38.4%	33.3%	12.1%
合計	人数	80	76	59	74	11	37	30	75	68	23
	%	35.9%	34.1%	26.5%	33.2%	4.9%	16.6%	13.5%	33.6%	30.5%	10.3%
		NS	**	NS	NS	NS	*	NS	NS	NS	NS

(8) 年齢(小中高の3区分)×内化された行動

		内化された行動の有無		
		有り	無し	合計
小学生	人数	95	29	124
	%	76.6%	23.4%	100.0%
中学生	人数	59	5	64
	%	92.2%	7.8%	100.0%
高校生・中卒	人数	26	9	35
	%	74.3%	25.7%	100.0%
合計	人数	180	43	223
	%	80.7%	19.3%	100.0%

*

(9) 年齢(小中高の3区分)×外化された行動

		外化された行動の有無		
		有り	無し	合計
小学生	人数	120	4	124
	%	96.8%	3.2%	100.0%
中学生	人数	60	4	64
	%	93.8%	6.3%	100.0%
高校生	人数	21	14	35
	%	60.0%	40.0%	100.0%
合計	人数	201	22	223
	%	90.1%	9.9%	100.0%

動」の3項目について男性が女性を上回る傾向となっている。それ以外の「他者を攻撃」、「こびる」、「他者を操作する」、「無断外出、放浪、徘徊」、「火遊び、放火」は女性が男性を上回る傾向となっている。

(7) 性別×心理治療場面での行動特徴

性別と心理治療場面での行動特徴のクロスでは、「こだわる」と「遊び方を知らない」の項目において有意差が認められた。2項目とも女性に比べ男性の方が高い傾向となっている。

(8) 年齢(小中高の3区分)×内化された行動

年齢(小中高の3区分)と内化された行動のクロスでは、中学生が「内化された行動が有り」の傾向が小学生、高校生に比べ高くなっている。

(9) 年齢(小中高の3区分)×外化された行動

年齢(小中高の3区分)×外化された行動のクロスでは、小学生が「外化された行動有り」の値が最も高く、年齢が上がるにつれて低くなっている。

(10) 年齢(小中高の3区分)×心理治療場面での行動特徴

年齢(小中高の3区分)と心理治療場面での行動特

徴のクロスでは、「攻撃的である」、「気が散る」、「色々な遊びをする」、「象徴的(暗喩)な遊びを用いる」、「その他」の5項目において有意差が認められた。

「攻撃的である」、「気が散る」、「色々な遊びをする」、「象徴的(暗喩)な遊びを用いる」の4項目において小学生のみが平均値より高い値となっている。

「その他」では年齢が低くなるにつれて値も下がっている。

IV 情短における被虐待児童の行動特徴に関する考察

(1) 性別と虐待要因(第1要因)

性別と虐待要因(第1要因)の分析では、「身体的虐待」、「心理的虐待」では男性が、「性的虐待」と「ネグレクト」は女性の割合が高い傾向となっている。情短に入所している児童の虐待の第1要因が性別による違いがあると言える。「性的虐待」に関しては、男性の被害児童の報告も増えつつあり、発覚しているかどうかという点を考えると、この結果についても慎重に検討する必要がある。

(10) 年齢（小中高の3区分）×心理治療場面での行動特徴

n=223

		攻撃的である	こだわる	気が散る	色々な遊びをする	遊びを嫌がる	遊び方を知らない	遊ぶことに不安	象徴的（暗喩）な遊びを用いる	行動化（プレイルームから出る、時間を延ばす等）	その他
小学生	人数	58	50	45	60	4	23	18	61	43	5
	%	46.8%	40.3%	36.3%	48.4%	3.2%	18.5%	14.5%	49.2%	34.7%	4.0%
中学生	人数	17	17	11	11	5	12	9	8	15	10
	%	26.6%	26.6%	17.2%	17.2%	7.8%	18.8%	14.1%	12.5%	23.4%	15.6%
高校生・中卒	人数	5	9	3	3	2	2	3	6	10	8
	%	14.3%	25.7%	8.6%	8.6%	5.7%	5.7%	8.6%	17.1%	28.6%	22.9%
合計	人数	80	76	59	74	11	37	30	75	68	23
	%	35.9%	34.1%	26.5%	33.2%	4.9%	16.6%	13.5%	33.6%	30.5%	10.3%
		***	NS	**	***	NS	NS	NS	***	NS	**

(2) 性別と内化された行動の有無

性別と内化された行動の有無では、内化された行動が男性に比べ女性の方が有りとなる割合が高い傾向となっている。この結果から、性別による不適応行動の表れ方が異なり、女性の方が内化された行動で不適応行動が出る傾向が高いと言える。

(3) 性別と内化された行動（第1順位）

性別と内化された行動（第1順位）の関係では、「引きこもりや抑うつ」、「自発性や欠如を示し不活発」、「原因が特定できない恐怖症」、「認知的に非常に過敏であり、不安が強い」、「睡眠障害や夜驚、夜尿・遺尿」、「退行」、「強迫行為」、「その他」の8項目において男性が女性を上回る傾向となっている。それ以外の「不平や不満の訴えが過剰」、「身体的な不調の訴えが多い」、「自傷行為」、「摂食障害」、「解離」5の項目において女性が男性を上回る傾向となっている。これらの結果から、内化された行動の各項目において、性別による違いがある傾向があると考えられる。男性では特に精神面での問題や、行動での問題が女性より多く、逆に女性では身体的な問題が多いと言える。

ケアの観点から考えると、男性に対して精神面や行動面での訴えがある場合は、安心を感じられるような支援を行うとともに、不安を整理し、言語化していくようなアプローチが必要であると言える。また、女性に対しては、身体的な訴えや自傷行為、摂食の問題がある際には、背景に心理的な問題も考えながら応じることが重要であると考えられる。

(4) 性別と外化された行動

性別と外化された行動（第1順位）の関係では、「他

者を攻撃」、「衝動性のコントロールが弱い」、「他者に対して挑発」、「性的行動」の4項目で男性が女性を上回る傾向となっている。それ以外の「こびる」、「他者を操作する」、「無断外出、放浪、徘徊」、「火遊び、放火」の4項目については女性が男性を上回る傾向となっている。これらの結果から、男性は攻撃性や暴力の形で表現しやすく、女性は対人関係における問題での表現が多いと言える。また、女性は「無断外出、放浪、徘徊」や「火遊び、放火」など反社会的な行動や施設の枠組みにも影響を与える問題においても多く示しており、深刻な問題と言える。

ケアの観点から考えると、男性が攻撃性や暴力の問題を示す場合は自己統制の課題があると考えられ、ストレス処理や表現の仕方を身につけられるようなアプローチが重要であると考えられる。また、女性が反社会的な問題や、施設の枠組みに影響を与える問題を示す場合は、施設の構造や枠組みも考慮にいたったアプローチが必要であると言える。

(5) 性別と内化された行動（第1順位）と虐待種別（第1要因）

性別と内化された行動（第1順位）と虐待種別（第1要因）のクロスでは、身体的虐待においてのみ有意差が認められた。身体的虐待が第1要因となる場合、「引きこもりや抑うつ」、「自発性や欠如を示し不活発」、「原因が特定できない恐怖症」、「認知的に非常に過敏であり、不安が強い」、「退行」、「強迫行為」の6項目で男性が女性を上回る傾向となっている。それ以外の「不平や不満の訴えが過剰」、「睡眠障害や夜驚、夜尿・遺尿」、「身体的な不調の訴えが多い」、「自傷行

為」, 「摂食障害」, 「解離」, 「その他」の7項目については女性が男性を上回る傾向となっている。これらのことから、虐待種別の第1要因が身体的虐待である児童が、内化された行動を示す場合、性別により内化された行動における表現の仕方が違うと言える。特に、男性では精神的な問題の項目、女性では身体的、行動的な問題の項目が多いと考えられる。

ケアの観点で考えると、身体虐待を受けた児童に対する支援においては、精神的な表現で不安が高い場合は不安を和らげるような支援が必要であり、身体的・行動的な表現の場合もなんらかの不安が表現されているものとして理解し、支援にあたることが重要であると言える。

(6) 性別と外化された行動(第1順位)と虐待種別(第1要因)

性別と外化された行動(第1順位)と虐待種別(第1要因)の関係において、身体的虐待においてのみ有意差が認められた。身体的虐待が第1要因となる場合、「衝動性のコントロールが弱い」、「他者に対して挑発」、「性的行動」の3項目において、男性が女性を上回る傾向となっている。それ以外の「他者を攻撃」、「こびる」、「他者を操作する」、「無断外出、放浪、徘徊」、「火遊び、放火」の5項目において女性が男性を上回る傾向となっている。これらの結果から、男性は攻撃性や暴力の形で表現しやすく、女性は対人関係における問題での表現が多いと言える。また、女性は「無断外出、放浪、徘徊」や「火遊び、放火」など反社会的な行動や施設の枠組みにも影響を与える問題においても多く示しており、深刻な問題といえる。身体的虐待が第1要因の場合は、女性も攻撃性の問題が高まると言える。

身体的虐待を受けた児童は、攻撃性や暴力が深刻な問題となり、時には反社会的な問題や、施設の枠組みを崩す問題となりうる。施設の体制や、関係機関の連携など大きな枠組みも踏まえた支援が重要である。

(7) 性別と心理治療場面での行動特徴

性別と心理治療場面での行動特徴の関係において、「こだわる」の項目にのみ有意差が認められた。心理治療場面での行動特徴は、性別による違いはそれほど見られなかった。男性では「こだわる」傾向が高くなっており、一つの特徴といえる。

(8) 年齢(小中高3区分)と内化された行動

年齢(小中高の3区分)と内化された行動の関係において、中学生が「内化された行動が有り」の傾向が小学生、高校生に比べ高くなっている。このことは発達段階

的に思春期になっている中学生が、行動での表現や象徴的な表現が多い小学生から、言語的に成熟してくる高校生への移行期であることが一つの理由として考えられる。それに伴い、外化された行動から内化された行動への移行していくことが予想される。

(9) 年齢(小中高3区分)と外化された行動

年齢(小中高の3区分)と外化された行動の関係では、小学生が「外化された行動有り」の値が最も高く、年齢が上がるにつれて低くなっている。このことから、年齢が上がるにつれ不適応行動の外化された行動が収まっていく傾向にあると考えられる。しかし、これは年齢が上がるにつれ外化された行動は問題の深刻さが増し、年齢が高くとも外化された行動を示している児童は情短の適応として困難を示すために、他施設(児童自立支援施設等)への措置変更の可能性も予想される。

ケアの観点から考えると、小学生から中学生、高校生に年齢が上がるにつれて、不適応行動の表現の形態に移り変わりがあることが予測され、それらに対して発達的な課題や言語能力に合わせた支援が必要出るということの根拠となると言える。

(10) 年齢(小中高3区分)と心理治療場面での行動特徴

年齢(小中高の3区分)と心理治療場面での行動特徴の関係では、「攻撃的である」、「こだわる」、「気が散る」、「色々な遊びをする」、「遊びを嫌がる」、「象徴的(暗喩)な遊びを用いる」、「行動化(プレイルームから出る、時間を延ばす等)」、「その他」の8項目において有意差が認められた。「攻撃的である」、「こだわる」、「気が散る」、「色々な遊びをする」、「象徴的(暗喩)な遊びを用いる」、「行動化(プレイルームから出る、時間を延ばす等)」の6項目において小学生のみが平均値より高い値となっている。これらのことから、低年齢であるほど、言語的な表現や自己統制が未熟であり、行動での表現や、象徴的な表現が多いと考えられる。

それ以外の「遊びを嫌がる」と「その他」では中学生のみが平均値より高い値となっている。このことは発達段階的に思春期になっている中学生が、行動での表現や象徴的な表現が多い小学生から、言語的に成熟してくる高校生への移行期であることが一つの理由として考えられる。

IV おわりに

本研究では、近畿圏の情緒障害児短期治療施設に入所

している被虐待児童の行動特徴を分析し考察を行った。性差や年齢差、生活場面や心理治療場面での行動特徴について、いくつかの知見が得られて被虐待児童（発達障害児童も含め）に対する支援についての有用な結果が得られた。今回は調査結果から得られた報告とするが、これからは本研究に基づいた行動特徴に関するアセスメントの精度を高めて、実際の生活支援や心理治療における指針を検討したいと考えている。本調査研究は情報において実施したが、被虐待児童が多く入所する児童養護施設においても検討することが必要である。被虐待児童（発達障害児童を含む）の健全育成のために、今後より詳しい研究やその検証から導かれた実践的な支援・治療方法論を導入したいと考える。

また、本研究のアンケート調査にあたり、ご協力をいただいた近畿情緒障害児短期治療施設協議会に属する現場の職員の方々には、この場をお借りしてお礼申し上げたい。アンケート調査のみならず、聞き取り調査も実施して貴重な時間を頂けたことに深く感謝致したい。

注1) 被虐待児童の行動特徴に関しては、Gil,E. (1991) .THE HEALING POWER OF PLAY Working with Abused Children「虐待を受けた子どものプレイセラピー」西澤哲-訳 (1997)における「内化された行動」、「外化された行動」pp16-18を参考に、筆者や複数の情短職員が被虐待児童における行動特徴を抽出したものである。今後の研究課題としては統計手法（因子分析等）を用いて行動特徴を解析したい。

参考文献

- 1) Gil,E. (1991) .THE HEALING POWER OF PLAY Working with Abused Children「虐待を受けた子どものプレイセラピー」西澤哲-訳 (1997) pp16-18
- 2) 滝川一廣他 (2001) :「児童虐待に対する情緒障害児短期治療施設の有効利用に関する調査研究」恩賜財団、母子愛育会平成12年度児童環境作り等の総合調査研究事業報告書
- 3) 滝川一廣他 (2003) :「児童虐待に対する情緒障害児短期治療施設の有効活用に関する縦断研究」(中間報告1) 子どもの虹情報研修センター 平成14年度研究報告書及び紀要No.1.2003
- 4) 滝川一廣他 (2004) :「児童虐待に対する情緒障害児短期治療施設の有効活用に関する縦断研究」(中間報告2) 子どもの虹情報研修センター 平成15年度研究報告書.2004
- 5) 八木修司他 (2008) :「被虐待児童の生活支援と心理ケア

について-近畿圏における情緒障害児短期治療の取り組みを中心に-」心理治療と治療教育-全国情緒障害児短期治療施設研究紀要 第19号 pp23-32

- 6) 八木修司他 (2008) :「被虐待児童の生活支援と心理ケアについて-近畿圏における情緒障害児短期治療施設のアンケート調査から」日本子ども虐待防止学会 第14回学術集会ひろしま大会 プログラム・抄録集 pp90

